

# 講読 Feminist geographies of digital work

---

## 概要 Abstract

フェミニズム思想は、「仕事」の本質主義的で規範的な分類に対して異議を唱えている。したがって、フェミニズムは、デジタル・ジオグラフィーズにおける理論的・実証的焦点として、「働く空間」に批判的なレンズを提供する。デジタル技術は労働活動を拡張し、強化し、職場の境界を出現させる。このような出現は、働く経験の両義性、つまり仕事を通しての肯定や否定の可能性を高める。デジタル地理学は、「親密さ」の両義性に関するフェミニストの理論化を通して提唱される。デジタル技術を伴う仕事の創発的な特性は、身体と機械が「工作中（at work）」であることの可能性を感じるポストワークの場所の親密さを通じて空間を作り出すことである。

## 1 はじめに Introduction

### デジタルワークとは

デジタルワークとは、デジタル製品を作ることに加え、デジタル技術を通じて労働活動を拡大・強化する、より広範な実践を含むものと理解される。仕事に関するこのような技術的变化は両義的であり、肯定と否定の機会を提供する。肯定的には、仕事はユートピア的な要求の基礎を提供し、創造的な充足として経験されるかもしれない。否定的には、過剰な労働が搾取として経験される場合は特に、仕事の削減がワーク・ライフ・バランスの主張を支持する。この論文では批判的にデジタルワークを見ると述べているが、単に否定をするものではないことに留意したい。筆者は、デジタル技術を通じた仕事の創発的な特性に対する批判的視点として、フェミニズムの思想の豊かさと複雑さを示すのである。そのため、デジタルを否定したり、フェミニズム批評がそういった仕事にアプローチする唯一の方法であることを示唆するわけではない。

### なぜフェミニズムに着目したのか？

多くのフェミニストは、仕事の時空間的な境界線に挑戦してきた。例えば、労働を「社会的再生産」へ拡大したり、「感情労働」の形態を通して労働活動がどのように意図化されるかを強調した。（Hochschild, 1983）異なり差別化された労働慣行を前景化することによって何が仕事としてカウントされるのかを問うことで、フェミニストたちは「職場」がいかに両義的であることを示してきた。例えば「家庭」というのは、様々な愛の労働から得られる快樂のように肯定的な労働経験であると同時に、そのような労働は無報酬であり、潜在的に搾取的であるという否定的なパラダイム的な場所として機能してきた。フェミニストの要求は、「女性の仕事」を肯定的に認めることを求めると同時に、仕事の差別化された性質がいかに直接的なカテゴリー分けを否定するかを示してきた。つまり、フェミニズムの特徴は、公私という二項対立的な区分に対して疑問を投げかけ、それらはむしろ両義的であるという可能性を提示することが特徴である。